昭和二十八年に於ける国語学界の展望

一、国語学史・国語史

壽岳章子

厳正な意味での「史」を扱ったもの以外に、古いものを資料としておればどういう方法見方をとっていようと、すべて国語史と称する常識的習慣のよしあしはさておき、とにかく現代語以前のものを対象としたものについて「展望せよ」とのことである。いいわけは引受けた以上卑怯であるが、それでも尚一言せずにはおれない。些か避遠の地に暮す身ではすべての業績に目を通せたとは思えず、又短時日で諸氏の労作を理解することも私には難いことである。二重の意味で非常に失礼を重ねているにちがいないのであらかじめお許しを頂きたい。漠然と国語学史と国語史とに二大別し、国語史に随時小項目を設けてゆく。

(一) 国語学史

「国語学史断章―万葉集の編纂」(人文研究四ノ六)塚原鉄雄氏。過去の国語史認識上の問題につき、編纂された万葉集を一例として論じたもの。視角を変えれば万葉集の性格論となって文学乃至は文献学の分野にもなるが、題目の意図するところは「言語に於ける歴史性の把握がいかになされたか」にあるのだろうから敢てこの項におさめた。色々の点で問題もあろうが、「言語の意識。反省」という命題の後にある諸種の世界を一般的に示している。その他、国語学研究書についての研究はかなりあった。類聚名義抄については二つのすぐれた研究がある。一は渡辺修氏の「図書寮本類聚名義抄と石山寺蔵本大般若経字抄について」(国語学十三・十四)であり、他は築島裕氏の「漢文訓読史資料としての図書寮本類聚名義抄」(十月東京国語学会研究発表会)である。前者は名義抄の公任伝の呉音から公任撰の大般若経字抄を実証したもの。後者は名義抄の引用の正確さを利用して現在では失われた古点を再現し、逸書の音義を推定したりするのである。「姉小路式の相伝について」(国語と国文学五月)は、根来司氏のテーマである姉小路式の制作者、相伝等についての新しい推定を示されたもの。「色葉字類抄考証」(東北大学文学部研究年報四)は佐藤喜代治氏の引続いての労作で、成立・書写・誤訓等の問題の外、意味なども扱ってある。馬淵和夫氏には「韻鏡研究の一系統―韻鏡秘決と七種反音を中心として―」(国語二ノ二三四合併)があり、諸種の伝本の関係の実証、中心人物の実厳・照珍の学統推定を行われた。室町時代になると遠藤嘉基氏以下二三の手になる「抄物目録」の一部発表があり(国語国文二十二ノ十)、森田武氏には(国語学十三・十四)の「落葉集本篇の組織について」及び「『捷解新語』成立の時期」(五月京都国語学会研究発表会)がある。前者はキリシタン版落葉集の組織を、母字・熟字の排列方針についてABC順や意味的聯関の問題から詳細に調査したもの。

単に一落葉集に止らず、キリシタン語学全般の問題をも含むと思われる。後者は歴史的事実とその組織等の丹念な掛合せによる新語成立時期の推定である。「方言意識上における中世」(国語二ノ一)永山勇氏。中世に於ける方言意識の新傾向として東言葉に対する自覚、方言区劃的意識、方言比較説の先蹤等を考えられた。「『あゆひ抄』における六運の用語例について」(国語国文学一号、二号)は、佐藤茂氏のあゆひ抄についての一連の労作の一部であるが、成章の有名な時代区分の術語及びそれに関する語例を索引的に集められたもの。尚あゆひ抄に関聯しては竹岡正夫氏に「富士谷成章と上田秋成との関係」(国語二ノ二三四合併)がある。あゆひ抄と安永三年刻の也哉抄との関係の一致を推定し、成章が宣長より以前に独立してオヲの所属を正していたことを証明するもの。岡田正世氏は「二種類の活語余論」(国語国文学二)「活語余論の所説について」(同上一)に於て同書の書誌的問題・内容について考究された。「江戸時代の文章論」(国語学十五)市川孝氏。従来さほど明らかにされていなかった分野であるが、文章の研究史上江戸が如何なる様相を示すか漠文と国文とに分け適正な解説を加えたもの。「江戸言葉のアクセントについての一資料」(国語学十二)福島邦道氏。斎藤彦麿の音声論の紹介、及びそれの有する資料価値についての論である、芸林の四の一―三に於て山田孝雄博士は「所謂神代文字の論」を発表されたが、種々の神代文字存在論に完璧の実証的止めをさすもので、この種のことについてはこれ以上何の論ずべきこともないかのように思われる。

㈡ 国語史

(原始期・上代)「日本語と南島諸語―系譜関係か寄与の関係か」(季刊民族学研究十七ノ二)泉井久之助博士。日本語はオーストロネシヤ語について系譜関係はもたぬが原初の語彙構成に当り寄与的関係を十分もつことの考察。俗間に怪しげな日本語南方語源説が風靡する折から、この種の真に学問的な研究は多くの人によってなされてほしいものである。二十八年は系統論的な論文があまり見当らないようで、一層この望みは切である。原始日本語に入ると、大野晋氏に「上代仮名遣の研究」(岩波書店六月刊)のあることは喜ばしい。何べんか書評の対象となったことでも分るように、とにかく種々の意味でこの分野に寄与する所の多いものである。この書の出版を機に益この方面の探求が盛になることであろう。尚大野氏には「日本語の動詞の活用形の起源について」(国語と国文学六月)があり、単なる史的問題の解明のみならず汎時論的な日本語の活用そのものゝ文法的特性を暗示する。万葉関係になると学界はやはりにぎわしい。単行本では平凡社からすぐれた意図と実践にみちた万葉集大成が全二十一巻中今年度八冊刊行され、国語学上にも益する所が大層大きい。その他諸論文では文法方面に「助動詞『たり』の形成について」(万葉七)春日和男氏、「万葉集の助詞」(解釈と鑑賞十二)林大氏、「助詞『に。と』の相関―万葉を主として―」(国語学十一輯)此島正年氏等がある。春日氏は「たり・てあり」の問題を考えられ、林氏は万葉の助詞中の願望と疑問について各情緒間の流動的関聯を考えられ新見をみせておられる。此島氏は豊富な実例で「に。と」助詞の機能的相関を論じられたが、更に問題を諸方面に発展させることも出来て有益であった。音韻方面には「万葉仮名『伊』『以』など」(五月京都国語学会研究発表会)宮島弘氏、「借音仮名とし

ての唇内入声音」（愛媛国文研究二）「入声音よりみた人麿の用字法」（万葉七）以上三吉陽氏等がある。三吉氏は唇内入声音の借音史上の万葉集の位置を考察され、借音仮名としてあまり好まれていなかった唇内入声音が万葉、特に入麿の歌に至り国語化して駆使されたといわれる。意味乃至は解読方面では「『わわらば』と『わくらば』」（万葉八）井手至氏、「音と光―『玉響』解読の方法」（国語国文二十二ノ八）佐竹昭広氏がある。前者は古来難解とされていた「わわらば」を「わくらば」と関係させ明快な論旨で解釈したもの。一般に誤解についての問題をも含むと考えられる。後者は「玉響」をタマカギルとよむことを誤字説に基かず、音と光を共通の感覚で捉える人間の普遍的心理傾向のあることから印欧語等の諸例で補いつゝ論じた。解読のためと断ってあるがことばの創造、絶対的比較等の大きい問題をも含み、一つの提論・方法となり得た。用字法では「万葉集における『之』の用法―表音表記の諸巻考察―」（岡山大学紀要二）井上富蔵氏がある。万葉の「之」字と表音表記の原則との結合の様子をみ、種々の問題をみちびいたもの。万葉以外では「音韻と語法―仏足石の歌一首―」（解釈と鑑賞十二）阪倉篤義氏、「淳仁称徳朝の宣命」（十月東京国語学会研究発表会）長尾勇氏、「古事記の文体に関する序説的考察」（名大文学部論集四）尾崎知光氏等がある。阪倉氏は仏足石歌中の乃祁留良について従来の無理な一語説を訂正、四活ノク（保存するの意）十アリと解された。尾崎氏は、近頃諸氏によって論のある古事記文体の解釈をされ、古事記ではその性格上文学はことばに依存するものであり、文献らしさをとゝのえるための顧慮は消極的になされたとのことを基点に色々論じられた。

この種の問題はいうまでもなく序文の完全な理解、本文の性格の種々性の解明が当時の歴史事実に支えられてなされることが必要なのであろうから、今後ともすぐれた諸発表をまつこと切である。「古事記用字法に関する一試論―者という字について」（人文研究四ノ九）直木孝次郎氏も、そうした立場の一つとして、「者」字の使用法から古事記の成立を推定されたものである。

（中古）十月に訓点語学会が誕生した。一見少くとも方法論や資料の点に於て実に特殊に思われ、かつ困難の多いこの種の学問にうちこむ人が次々に各地にあらわれていることはすばらしいことであったが、こうしたいわば特殊分野に終に学会が結晶したことは訓点語学の意義そのものゝ象徴であろう。相互の資料紹介や諸種の報告をつみ重ねて、やがてこの学会から様々のよき成果が生れることを期待する。この学会が内にも外にもむかうことを心からねがうことである。訓点関係の諸論文の発表も多く、資料の調査・報告の類では「高山寺彌勒上生経賛古点に関する調査報告」（国語学十一）中田祝夫氏・築島裕氏、「石山寺守護国界主陀羅尼経の訓点」（国語国文二十二ノ十一）「石山寺本法華義疏の訓点」（島根大学論集三）以上何れも大坪併治氏があり、春日政治博士は「法華経玄賛の古点について」（文芸と思想七）に於て石山寺旧蔵のものにつき、仮名遣及仮名字体沿革史料の修正・補充をされた。その他特定テーマの研究では「『也』字の訓について」（十月東京国語学会研究発表会）春日和男氏がある。漢文に於ては本来助辞であった「也」字が「なり」の定訓を与えられる前の状態の考察である。「漢文訓読史上の一問題―再読字の成立について―」（同上発表会）は、小林芳規氏が平安初期の訓点にはなかった再読字

の成立過程を論じられたもので、再読字一個の問題ではなく、肯定・否定の如何にかゝわらず訓点史全体に関係する全体的視野の一角を占めるものに発展してゆこう。同じく小林氏は「いはゆる主格助詞『い』は副助詞と考ふべきである」(国語二ノ二三四合併)を発表されたが、殆ど同じうして発表された稲垣瑞穂氏の「古訓点にあらはれた星点の『イ』」(国語国文二十二ノ十一)と比べあわせると甚だ興味深い。小林氏は、「イ」はその種々のあらわれ方の整理の結果、副助詞かと推定され、稲垣氏は「イ」が指摘性再現説明の意味あることを文脈からとらえようとされる。一の語の真の理解への両面かと思われる。いずれにせよ、訓点語自体の歴史性への着眼、用例の真の解釈についての反省を経て文法体系を樹てることは望ましいが、いかなる視点にたつ品詞論を適用するかについては十全の理論的準備が必要であろうし、又それはさておいて当面の場的理解が目的であっても結局はそれを目的とせねば理解も又困難になることであろう。この「イ」問題は訓点資料研究のもつ種々の性格を端的に語るようである。物語文学の方でもこの一年間に様々の仕事があった。中で喜ばしいのは池田亀鑑博士を中心として「源氏物語大成全六巻」(中央公論社)が校異篇二巻、索引篇一巻が出版されたこと。こういう基礎の上にたって今後の源語学乃至は中古国語学は大いに発展することであろう。諸論文ではまず「源氏物語の助詞接続計数表(一)」(国文学論叢四)中川浩文氏、「隆能源氏絵詞に於ける『御』」(国語国文二十二ノ八)伊吹和子氏が、用例の整理を行っている。「御」については、かながき漢字がきの各用例調査から読分けの基本方針が探られている。佐伯梅友氏の「筆のそれ」(国語学十三・十四)と「はさみこみ」(国語国文二十二ノ一)は、文献の扱いに対する従来の劃一主義に対して、挿入部による連結中断やいわゆる文法でわりきれぬものの取扱いを考えられたが、本年度も引続き国語国文誌上に載った遠藤嘉基博士の「新講和泉式部物語」などにみえる解釈とあわせ思う時、共に「文」の真の把握という問題について新しいみかたを思う。中古語或いはそれ以前についての敬語論議は大そう盛で、「『まをしたまふ』の意義」(国語と国文学六月)を三宅清氏が論ぜられ、同誌十二月にはそれに対する意見として時枝誠記博士の「『申したまふ』についての考」がある。一はいわば事柄からの想定であり。一は敬語体系そのものゝ内部問題として扱われているが、それぞれに議論は発展するであろう。誤解を極力避けてなら、この種のやりとりは中々意義ありと思われる。その他では「源氏物語にあらはられた『給ふる』と『侍り』」(国語国文二十二ノ十)伊藤和子氏があって、給ふるも侍りが辞である以上辞的であるとのべられた。他の文法面を扱ったものは長船省吾氏の「助動詞『けり』の意味について」(十月東京国語学会研究発表会)、北山谿太氏の「助詞の省略、係結など」(国語と国文学八月)、宮田和一郎氏の「時の助動詞『たり』」(平安文学研究十二)、「対話消息文、動詞『まかづ』」(同上十一)、真鍋次郎氏の「『らむ』の意味」(愛媛国文研究二)等がそれぞれ発表された。又、「『べらなり』について」(平安文学研究十一)で安部秀子氏は「べら」は「めり」が「む十り」である如く、「推量のべ十存在指定のり」であり、めりとべりはmbの対立で位相差を表すとされたが、些か問題があるかに思われる。スタイル文章等の点については「源氏物語。枕草子の助詞」(解釈と鑑賞十二)宮田和一郎氏がある。枕と源氏の文

体差は助詞の使用法でもよくあらわれていることを証された。林和比古氏には「枕草子における描写文と判断文」（阪大南比校研究集録）がある。阪倉篤義氏は「歌物語の文章―なむの係り結びをめぐって―」（国語国文二十二ノ六）を発表されたが、係助詞「なむ」の表現価値を手がかりとして、左註↓左註的詞書↓歌物語の系列をさぐったもの。いわば〝文法〟的徴標から〝文体〟の問題にも到達した興味ある論で、標題以外に提示される問題も数多いのである。語彙方面では「源氏物語の『うつくし』と『らうたし』」（平安文学研究第十一輯）大塚且氏と『さうしのかみ』『らうたし・うつくし攷』―源氏物語の用語について」（徳島大学学芸紀要三）宮城文雄氏がそれぞれ別個の立場であらわれて興味深かった。以上の物語関係以外には、奥村三雄氏「音節とアクセント―呉音声調の国語化―」（国語国文二十二ノ十）が見える。日本語に於て上昇音節が存在しがたいというアクセント上の事実が呉音の去声調との接触に及ぼした問題をとりあげ、明確周到な立論をされた。尚、纐刻としては源氏物語絵巻詞書（国語国文二十二ノ八）がある。更に寛元本和泉式部物語（平安文学研究）もある。その外、塚原鉄雄氏の手で竹取物語の語彙索引が出来たことも嬉しい（三色菫の会、謄写印刷）。

（中世・近世）「海道記に及ぼせる四六文の影響―字法・対偶法を中心として―」（国語と国文学七月）では松井栄一氏が四六文の忠実な再現である海道記について考えられ、佐藤喜代治氏は「平家物語と記録体の文章」（文芸研究十五）に於て、平家物語が純正な漢文よりも記録体の文要素が深くしみこんでいることを、語法、語彙、新造語、宛字等にわたり適確に実証された。「室町時代に於ける活用語の実態」（国語国文学紀要三）井上章氏は、天草本伊曾保物語を材料として活用語の用例整理を行われた。詳細な調査であるが、例えば「な」にする係結が乱れた例はないというような記述からは、「な」なしで文末の「そ」のみで禁止表現を行った例があることが考えられにくい。又、殆ど同一意義を表現すると思われるにもかゝわず、例えば下二段アヤシムル、四段アヤシムが共存するといった事実も附記してほしい。中世の語学資料の纐刻としては柊源一氏の手になる「さんたまりあのおひしよ」（国語国文二十二ノ十）、高羽五郎氏の諸労作「譬喩尽二」「森田武編元和本下学集索引」「ロザリオの経Ⅱ」等がある。近世関係は「仙台俚言考（上）」（文芸研究十四）浅野健二氏、「江戸語の音韻と東国方言」（国語二ノ三四合併）福島邦道氏、「西鶴用語小考」「同上」前田金五郎氏、「江戸語資料としての江戸小咄」（桐朋女子学園紀要三）池上明彦氏、「江戸語における語連接上の音韻現象―浮世風呂・浮世床を資料として―」（お茶の水女子大人文科学紀要四）松村明氏等がある。福島氏のものは様々の資料を広く適正に利用されている。松村氏のは詳細な調査の結果であるが、個々に多少とも説明を加えられる場合今少し史的な観点でみて頂けたらと思う。例えば接続助詞「ば」に相当するものが形容詞及び打消助動詞「ぬ」の未然形「ず」に連なる場合すべて「は」と表記される云々のあたり、或いは「なけりやー」を「なければ」の単なる融合現象と説かれるあたりである。

以上は主として各時代に焦点のあるものであったが、各時代にわたって論述されたものには次の如きものがある。「短歌音調と

国語音韻史との一問題―字余り句とその音価に関して―」（短歌研究十ノ九）中田祝夫氏、平安後期以後のオ・ヲがWoに帰したことを前提として字余りを論じ、Woならばyeと同じく字余りにならぬ筈なのが事実はその反対であるのは、前時代の和歌の伝統的な語句、成句の踏襲の結果であるとされた。「語音結合の型よりみた擬音語・擬容語―その歴史的推移について―」（国語国文学一月）森田雅子氏。日本語における音象徴が如何なる型の存在を経て来ているか、各文献資料を網羅して現在に至るまでの確実な調査であり、この種の研究領域に益するところが多かった。「『やうやう』から『やっと』へ」（人文研究四ノ六）浜田敦氏、古くからあった「やうやう」という語がどんな意味変化を辿って終には現代語の「ヨーヤク」「ヤット」に落着いたかを、文脈による意味変化、同義語との戦い、他語との混淆等の理由によって論じられたもの。「副詞」というものは文法的にも意味的にも種々の問題があるものであるが、これら一語一語のそれぞれの問題の追求のあとに再び副詞そのものゝ、或いは言語そのものゝある命題が浮び上るのではなかろうか。

その他漢語を扱ったものに山田俊雄氏の「漢語研究上の一問題―鮫鰐をめぐって―」（国語と国文学十一月）、亀井孝氏の「雁」（文芸と思想七）がある。山田氏は従来の漢語研究の方法論的反省を生み出す幾つかの条項を、鮫鰐なる一単語の周辺からとり出された。又、亀井氏は、かり→がんの変化の考察の一端を示されたが「がん」という一見字音語にみえる語彙が「かり」にとってかわったのは、日本語から漢語への変化でなく、「かり」なる形そのものが「がん」を生み出したのだということである。その底には、日本語の生活に於ける非常に複雑な一種の漢語のあり方の考察が含まれるのであろう。この二つの論文からは、従来の国語史研究に於てはあまり浮び上らなかったランガージュというようなことばが聯想されるのであるが、それと関聯して池上禎造氏の「自筆本の誤字」（国語国文二十二ノ十）の問題が思われる。自筆本の誤脱という面を手がかりとして、課題としての文字史を暗示するものであるが、「文字生活、及びその環境」というような概念が必要になってきたことはとりもなおさず二十八年度のさまざまのすぐれた研究成果中の一つの色彩を示すものであろう。

片手落ののべ方をしてきたにちがいないことを恥じつつ、全体を考えてみると、日本語の歴史中上代や中古はいつもいつも論文量が甚だ多く、従って多くの角度からながめられている。それに反し、中世以降は量も少く、従って各発表者は些か孤軍奮闘的にならざるを得ない状態である。従来の伝統的事実を思う時当然の事態ではあるが、跛行的であるにちがいない以上、一刻も早く資料のよき整頓と、然るべき眼とを具えて、各時代等しなみの成果があげられればよいと思う。更に又、言語的な歴史概念の樹立や変化そのものゝ追求が今少し考えられてもよい頃になったのではないかと思う。二十九年度の一層の発展を願いつゝ拙い筆をおく。

―西京大学助教授―

附記。二十七年度に於て口頭発表としてとりあげられたものは二十八年度に文字にされてもとりあげなかった。

又本年度で略同一内容のものが口頭、文字両方あるときは文字の方に従った。